

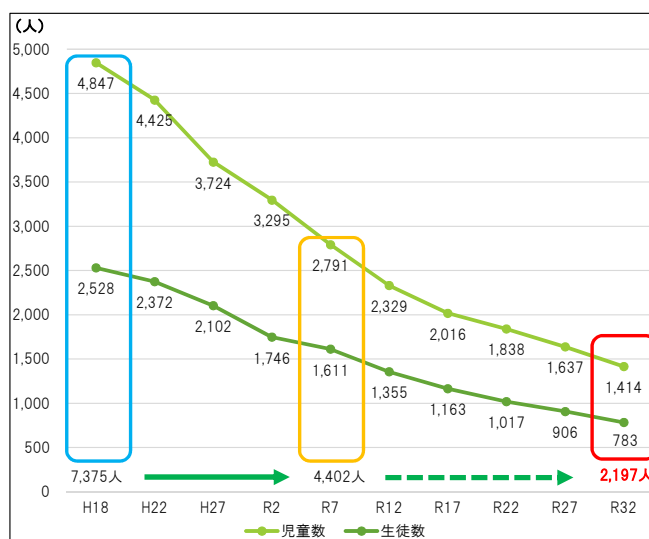
渋川市立小中学校の児童生徒数等 推移と推計

教育総務課学校適正規模・適正配置推進室

目次

1. 児童生徒数の状況
2. 学校規模の状況
3. 中学校区別児童生徒数の推移と推計
4. 小規模化により予想される影響

1 児童生徒の状況



- 全国的な流れと同様に、渋川市においても人口減少・少子高齢化が進行しています。年少人口(0歳から14歳)もまた、昭和55年以降減少し続けており、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、今後も減少していくことが予想されています。
- 児童・生徒数についても減少が続いている状況です。平成18年の7,375人から、令和7年度までに**2,973人の減少(約40%減)**となっており、令和32年までには**5,178人減少(約70%減)**することが予想されています。

2 学校規模の状況

□ 小学校

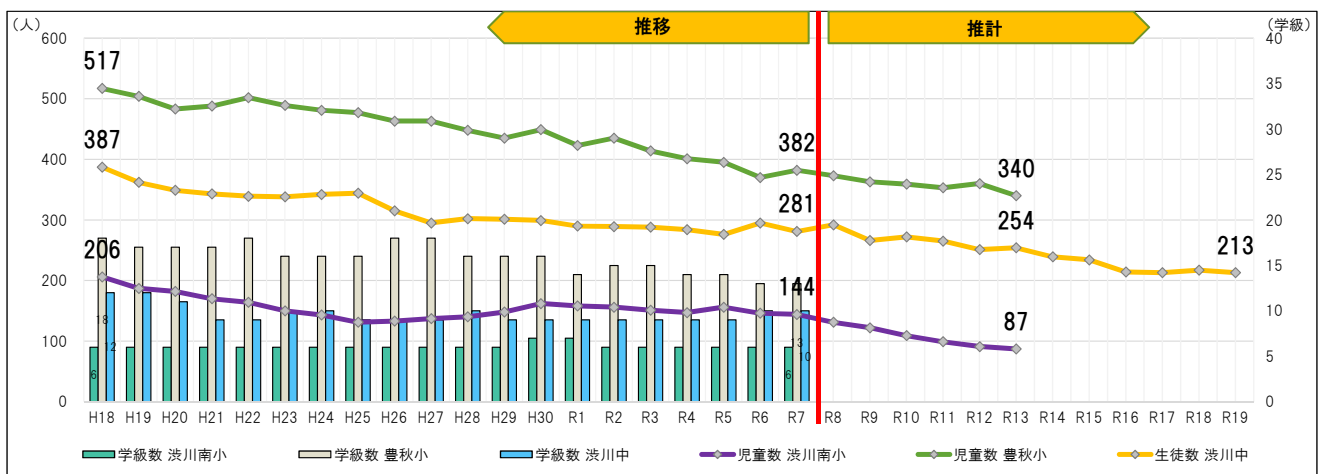
学校規模	学級数	学校名	児童数	学級数
過小規模校	1学級～5学級	小野上小	16	3
		伊香保小	34	4
		津久田小	94	6
		渋川西小	99	6
		橘北小	111	6
		金島小	136	6
		渋川南小	144	6
		三原田小	178	7
		中郷小	188	7
		橘小	196	8
		長尾小	272	11
		渋川北小	318	11
適正規模校	12学級～18学級	豊秋小	382	13
大規模校	19学級～	古巻小	624	21

□ 中学校

学校規模	学級数	学校名	生徒数	学級数
過小規模校	1学級～2学級	該当なし	-	-
		伊香保中	32	3
		赤城北中	61	3
		金島中	91	4
		赤城南中	105	5
		北橘中	209	7
		渋川北中	249	8
適正規模校	9学級～15学級	古巻中	279	9
		渋川中	281	10
		子持中	304	10
大規模校	16学級～	該当なし	-	-

※児童数・生徒数共に、令和7年5月1日時点の通常学級在籍者及び特別支援学級在籍者の合計となります。
 ※学級数は通常学級数の合計となります。
 ※学校規模の分類は、渋川市立小中学校適正規模・適正配置基本方針で定めた適正規模基準をもとに設定したものとします。

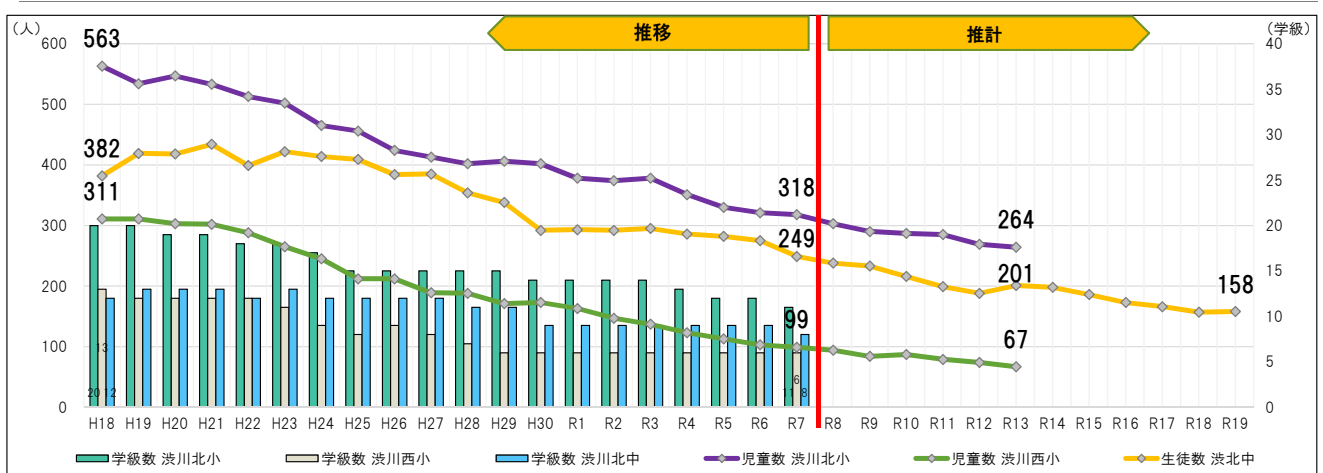
3 - 1 澁川中区の児童生徒数推移と推計



※R7以前は学校教育課「児童・生徒数一覧」に基づく実績値を、R8以降は義務教育就学前幼児数調査を参照し、事務局で作成

児童数・生徒数共に減少が続いており、平成18年度から令和7年度までに**澁川南小は30.1%、豊秋小は26.1%、澁川中は27.4%減少**している状況です。学級数も同様に減少傾向で、令和7年度時点では豊秋小・澁川中が適正規模の範囲内ですが、澁川南小は小規模（全学年単学級）であり、今後の推計を考慮すると、長期的には更に減少していく可能性があります。

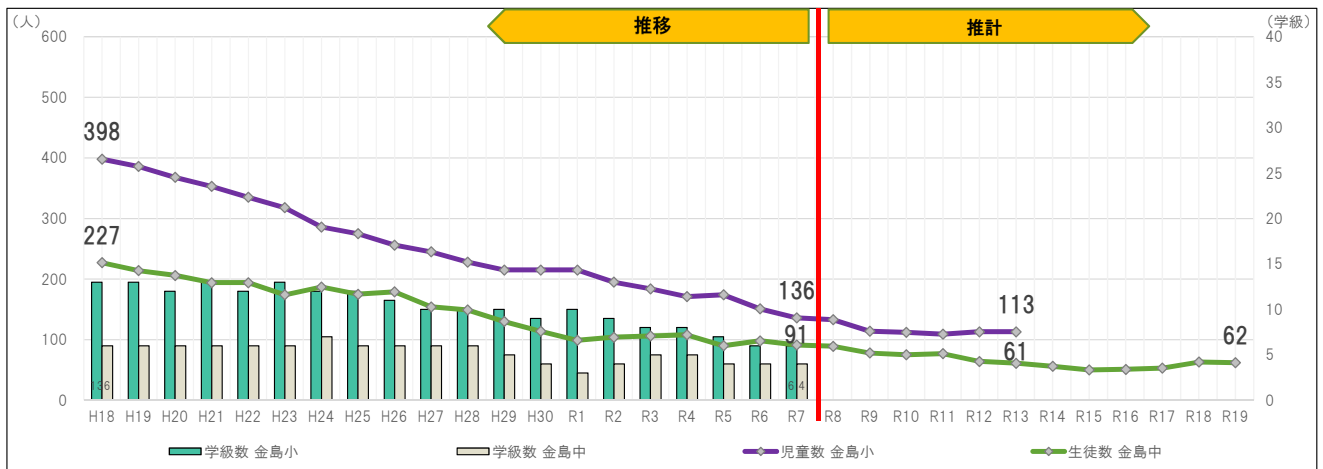
3 - 2 澁川北中区の児童生徒数推移と推計



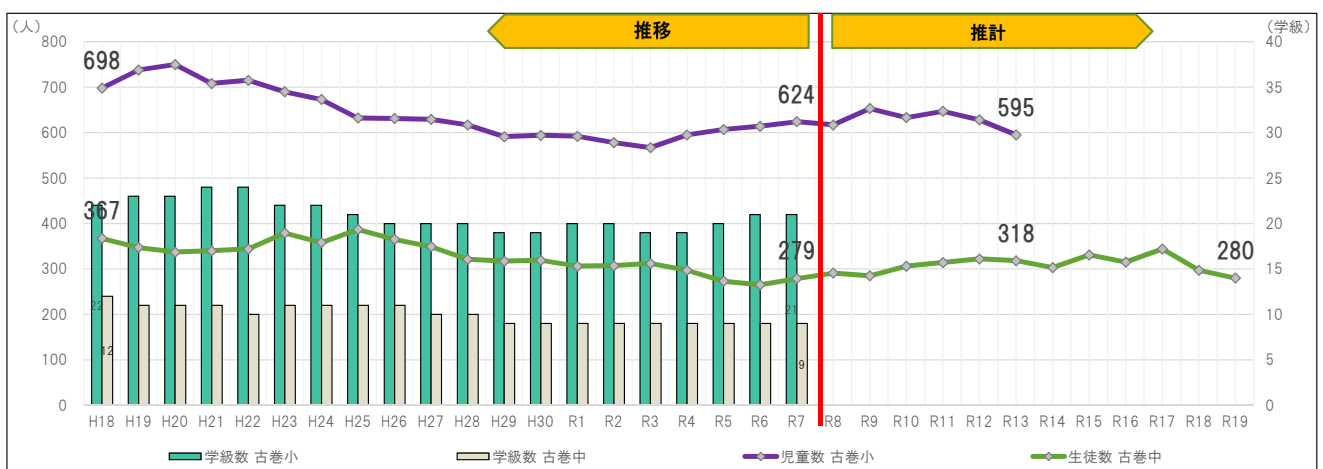
※R7以前は学校教育課「児童・生徒数一覧」に基づく実績値を、R8以降は義務教育就学前幼児数調査を参照し、事務局で作成

児童数・生徒数共に減少が続いており、平成18年度から令和7年度までに**澁川北小は43.5%、澁川西小は68.2%、澁川北中は34.8%減少**している状況です。学級数も同様に減少傾向で、令和7年度時点では澁川北小・澁川西小のいずれも小規模校となっており（澁川西小は全学年単学級）、今後の推計を考慮すると、更に学級数が減少していく可能性があります。

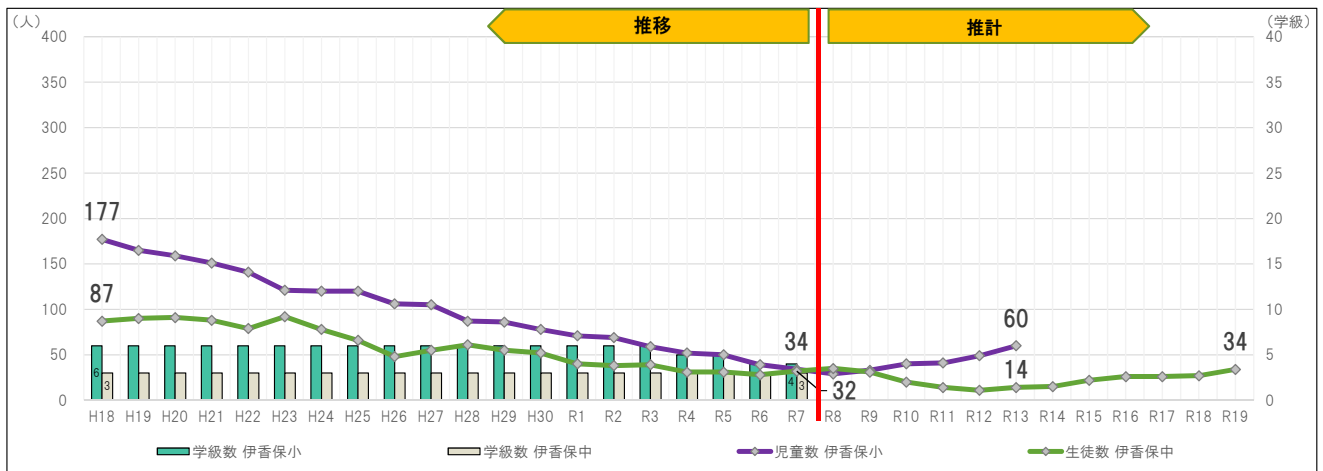
3 - 3 金島中区の児童生徒数推移と推計



3 - 4 古巻中区の児童生徒数推移と推計



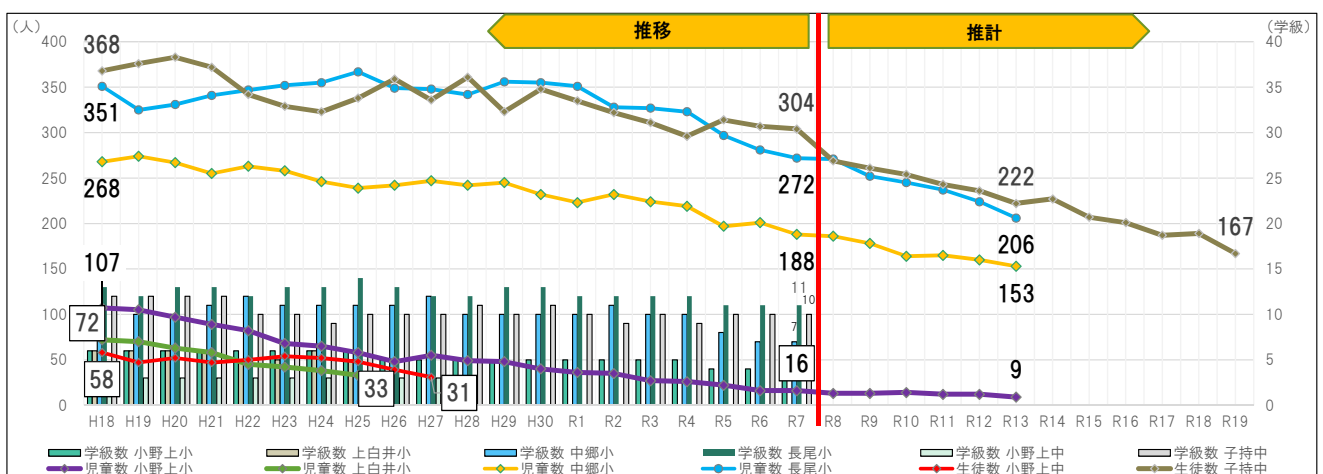
3 - 5 伊香保中区の児童生徒数推移と推計



※R7以前は学校教育課「児童・生徒数一覧」に基づく実績値を、R8以降は義務教育就学前幼児数調査を参照し、事務局で作成

児童数・生徒数共に減少が続いており、平成18年度から令和7年度までに伊香保小は80.8%、伊香保中は63.2%減少している状況です。学級数については、令和7年度時点で伊香保小は過小規模(複式学級発生)、伊香保中は小規模(全学年単学級)となっており、今後の推計を考慮すると、伊香保中でも一時複式学級が発生する可能性があります。

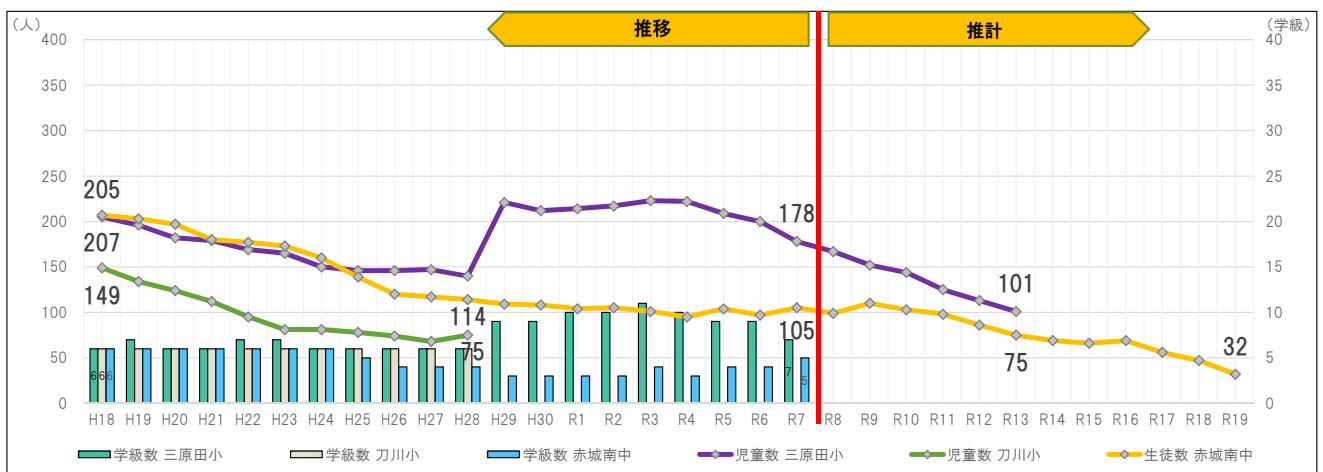
3 - 6 子持中区の児童生徒数推移と推計



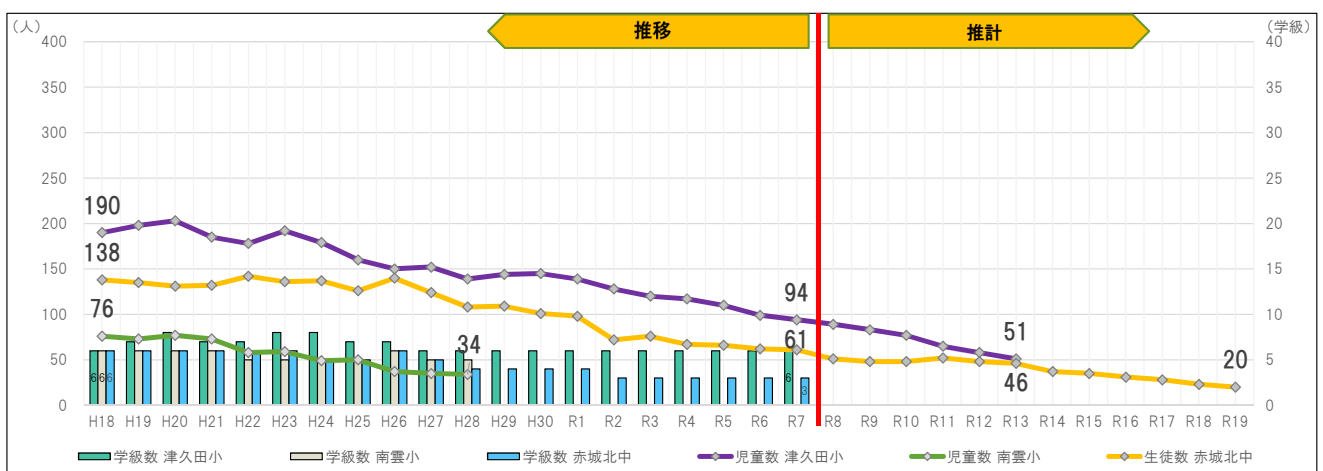
※R7以前は学校教育課「児童・生徒数一覧」に基づく実績値を、R8以降は義務教育就学前幼児数調査を参照し、事務局で作成

児童数・生徒数共に減少が続いており、平成18年度から令和7年度までに小野上小は85.0%、中郷小(上白井小含む)は44.7%、長尾小は22.5%、子持中(小野上中含む)は28.6%減少している状況です。学級数については、子持中は適正規模ですが、小学校は全て小規模校(小野上小は過小規模校)となっており、今後の推計を考慮すると、子持中も小規模校に移行する可能性があります。

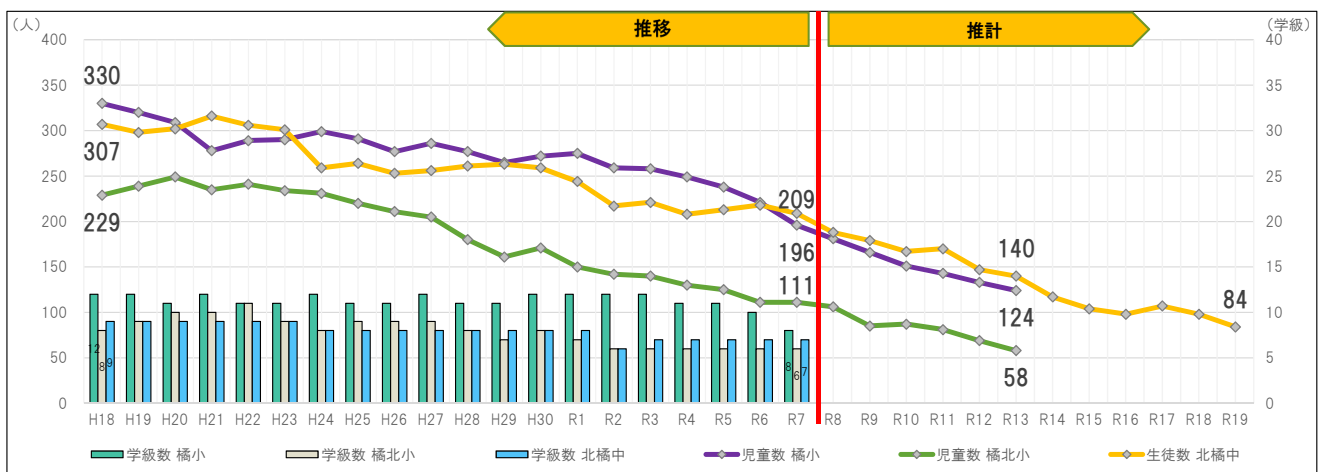
3 - 7 赤城南中区の児童生徒数推移と推計



3 - 8 赤城北中区の児童生徒数推移と推計



3 - 9 北橘中区の児童生徒数推移と推計



※R7以前は学校教育課「児童・生徒数一覧」に基づく実績値を、R8以降は義務教育就学前幼児数調査を参照し、事務局で作成

児童数・生徒数共に減少が続いており、平成18年度から令和7年度までに橘小は40.5%、橘北小は51.5%、北橘中は31.9%減少している状況です。学級数は、多少の増減がありつつも減少傾向で、令和7年度時点では橘小・橘北小・北橘中のいずれも小規模校（橘北小は全学年単学級）となっています。今後の推計を考慮すると、更に学級数が減少していく可能性があります。

4 小規模化により予想される影響

小規模校のメリット(例)

- 児童生徒一人ひとりに目が届きやすく、個性や特性に応じたきめ細かな指導を行いやすい。
- 学校行事等において、児童生徒一人ひとりの個別の活動機会を設定しやすい。
- 児童・生徒相互の人間関係が深まりやすい

小規模校のデメリット(例)

- 集団の固定化により、切磋琢磨の機会が減少したり、多様な見方や考え方が出にくい。
- 運動会などの学校行事や音楽活動等の集団教育活動に制約が生じやすい。
- クラス替えができないため、人間関係や相互の評価等が固定化しやすい。

一般的に、小規模校には上記のようなメリット・デメリットがあると言われていますが、児童生徒の教育環境をよりよくしていくためには、このようなデメリットを解消していく必要があります。